インタビュー

このコーナーは県出身者で各界で活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

山下眞臣

厚生省の本県出身の事務次官は山下眞臣氏で二人目である。

山下氏は荒尾の出身で、厚生省内での評判は「外柔内剛」、「肥後もっこす」だそうだ。来たるべき高齢化社会の到来に備え、多忙な毎日である。

「難しい時期に次官に就任しました。」と柔らかい物腰で語る中にも厚生省職員七万数千人のトップとしての責任感の強さが伝わって来た。

略歴紹介

山下眞臣（やました・まおみ）

○昭和二年　熊本県荒尾市に生まれる

○昭和二十五年　東京大学法学部卒業　厚生省入省

○昭和四十年　厚生大臣秘書官

○昭和五十年　環境衛生局水道環境部長

○昭和五十一年　厚生大臣官房長

○昭和五十三年　社会局長

○昭和五十六年　社会保険庁長官

○昭和五十七年　厚生事務次官

クラブ活動もできなかった学生時代

荒尾市の出身です。私が子供の頃はまだ白砂青松のきれいな所でした。海の近くに家があったもので、よく泳いだり、貝をとりに行ったりしましたよ。あの辺では、うば貝がとれたんですが、あまりよそではとれないようですね。冬場に生を酢ヌタで食べるうば貝は故郷の味です。

小学校時代の思い出といえば、二年生の時の担任の女の先生が金沢出身の独身できれいな方でしたが、その先生に可愛がられましてね。一年間で先生は嫁がれたんですが、その後も文通を続けていました。戦争が激しくなり、その後音信不通になっていたのですが、二年ほど前、私が社会保険庁長官だった時にたまたま先生が年金の受給者で、請求書の名前を見て、教え子じゃないだろうかとご連絡をいただいたんですよ。それで去年の一月に四十年ぶりに再会しました。先生も七十歳になっておられましたが、荒尾時代のことを懐しく話しました。

中学二年の時に戦争が始まり、学生時代はすっかり戦時色に包まれ、緊張した毎日でした。野球部なども私の入学前に解散してしまって、当時はクラブ活動なんて雰囲気じゃなかった。もっぱら農作物を作る奉仕活動と軍事教練ばかりでした。

当時、荒尾では、男子は玉名中、女子は高瀬高女に通う者が多く、毎朝、同じ汽車で荒尾から玉名へ通学しました。前二両に男子が乗り、後二両に女子が乗るといった具合でした。ところが前二両の最後部には男子の最上級生が陣取るんですな。女子の方も最前部を上級生が占めていましたよ。思春期のさわやかな思い出です。

五高時代は戦争末期で、熊本大空襲も上通りの下宿で眼の当たりにしましたよ。終戦を機に世の中が一変しまして、自由を満喫することになるのですが、物質面では最悪の状況でした。大学受験の時は東京も焼け野原でした。荒尾から東京まで三十五時間かかりましたが、にぎり飯を五食分くらいもって出ました。車内は今では考えられないような込みようでしたね。

東京に出てみたものの、毎日の食物にも不自由する始末で、すいとん、とうもろこしのパンなんかを食べていました。有斐学舎（熊本県人の学生寮）に暫くいたのですが、動くと腹が減るし、三十六計寝てるにしかずです。へたに運動でもしようものなら結核になっていたでしょうね。大学時代もあまりいい思い出はないですな。物質面での復興は大学を出てからでした。